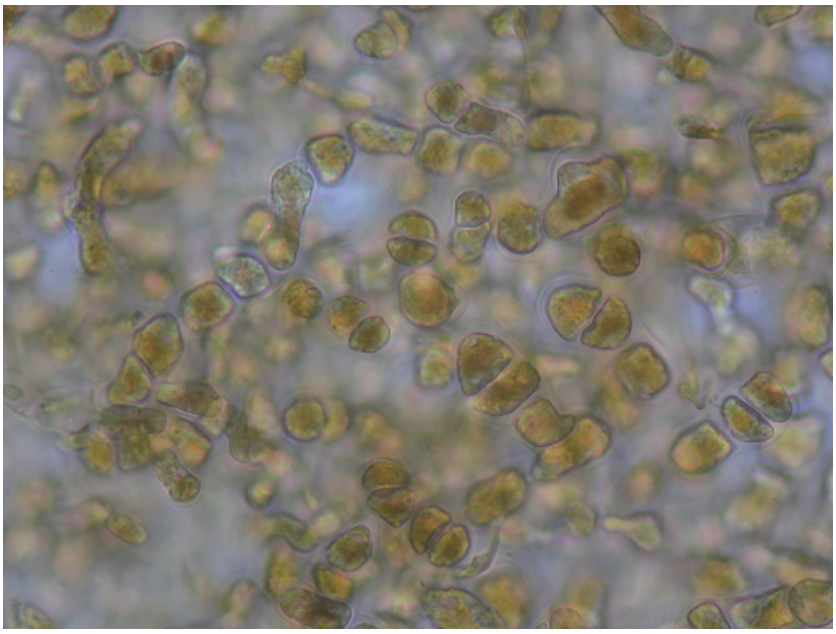
なみなみ通信

福岡県水産海洋技術センター情報誌

なみなみ通信は、センターと各研究所からの情報を、漁業者や県民の方に年4回のペースでお知らせする情報誌です。

VOL.58

発行 / 平成 25 年 10 月



順調に成熟するノリ殻胞子

調査情報
・海況情報 …… 2
・クラゲ漁に沸く有明海 …… 2
・マダイ幼魚の資源調査を実施 …… 3
・藻場再生の取組が拡大 …… 4
・アユ資源の回復に向けて …… 4
・筑前海沿岸でカレニア・ミキモトイ赤潮が発生 …… 5

研究情報
・ノリ乾燥機における省エネ技術の開発 …… 5

なみなみニュース
・小川知事がうのしま豊築丸を訪問 …… 6
・ウナギ対策会議が開催 …… 6
・福ふく祭りが開催 …… 7
・アユのつかみ取りイベントが開催 …… 7
・11 月は県イベント満載 …… 8

普及だより
・夏休みイベントを開催 …… 8

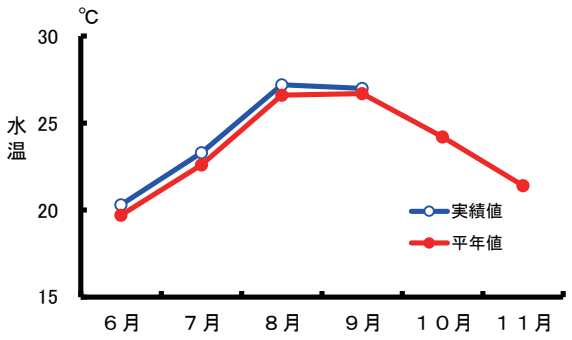
調査情報

海況情報

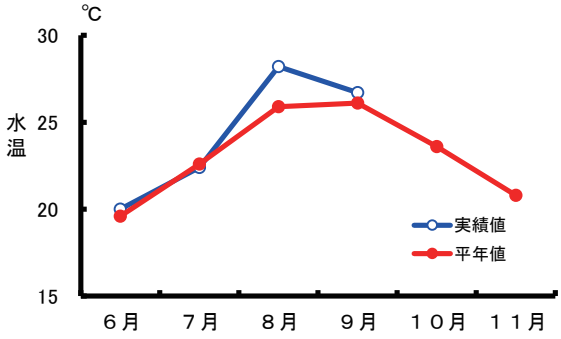
７～９月の表層水温は、筑前海の沖合域では、７、９月は平年並みで、８月がやや高めでした。沿岸域では、７、９月は平年並みで、８月は甚だ高めでした。

有明海では、７月はかなり高め、８月はやや高め、９月は平年並みで推移しました。

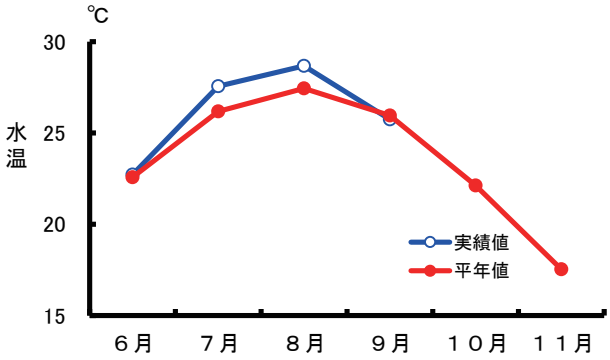
豊前海では、　７月は平年並みで、８月はやや高め、９月はやや低めでした。



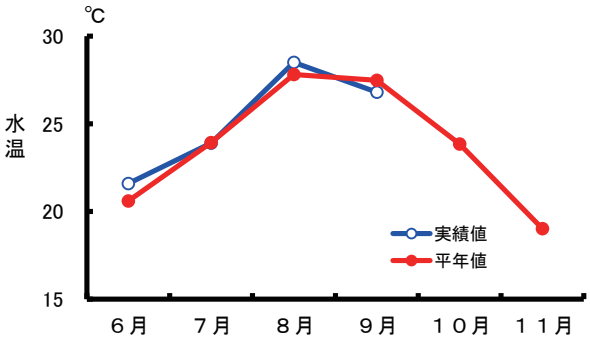
筑前海沖合域の表層水温



筑前海沿岸域の表層水温



有明海の表層水温



豊前海の表層水温

クラゲ漁に沸く有明海

有明海では、以前からビゼンクラゲ（通称：アカクラゲ）とヒゼンクラゲ（同シロクラゲ）という２種の大型クラゲが漁獲され、我が国でも数少ない産地として知られています。このうち、アカクラゲが昨年から増加し、高級食材として利用されている中国での需要増も相まって、クラゲ漁が活況を呈しています。有明研究所による実態調査の結果、水揚量がこれまでの数百トンから数千トンへと急増していることがわかりました。

また、今漁期は、漁船漁業の専業者に加えノリ養殖漁業者も出漁し、従来のたもすくい漁から固定式刺網漁主体へと移行したことが特徴です。漁獲されたクラゲの大半は中国へ輸出されています。

たもすくい漁と魚市場に並ぶビゼンクラゲ（左下）

（有明海研究所）

マダイ幼魚の資源調査を実施

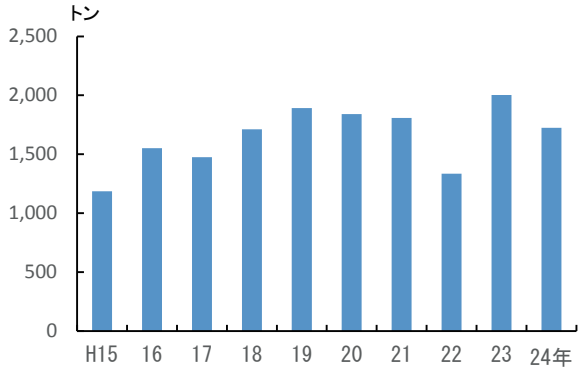
本県のマダイは、例年１千トンを超える漁獲量があり、2そうごち、1そうごち、釣りなど様々な漁業種類にとって重要な水産資源となっています。

県では、マダイ資源の持続的な利用を図るため、資源管理指針を策定しています。マダイ漁を行う各漁業種協議会は、県の指針に基づき資源管理計画を策定し、資源管理に取り組んでいます。これらの取組により、近年のマダイの漁獲量は安定しています。

センターでは、資源管理に不可欠な資源状況の把握のため、過去40年近くにわたりマダイ幼魚の資源量調査を実施しています。今年は７月10日、12日に糸島地区、福岡粕屋地区、宗像地区で幼魚分布量調査を実施しました。

その結果、糸島地区では非常に低い密度でしたが、宗像地区では平年を上回る生息密度であり、地域差が顕著ではあるものの、海区全体では平年の９割の密度となっています。

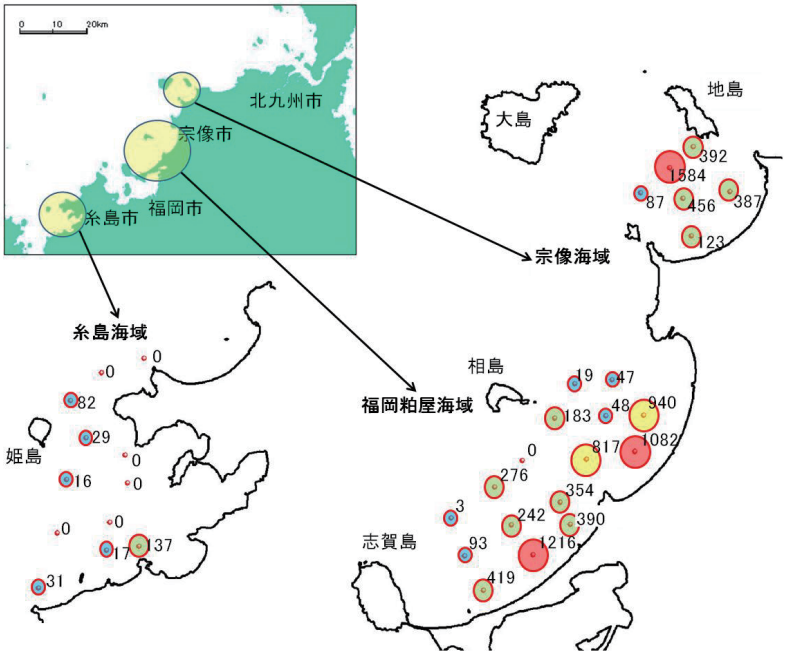
マダイは２才魚と３才魚が漁獲の主体となることから、幼魚調査の結果は２～３年後の漁獲量に影響すると考えられます。このため、今回、筑前海区全体では概ね平年並みの生息密度であったこと、前年の生息密度が比較的高かったことから、当面マダイの漁獲量は安定して推移するものと推察されます。



マダイ漁獲量の推移

マダイの資源管理指針・計画の概要

	漁業種類	資源管理の内容	
公的規制	ごち網	操業期間の制限 操業区域の制限 漁具の制限	
自主規制	ごち網	休漁日の設定	等



海域	平均入網数	前年比	平年比
宗像海域	５０５尾	１２９%	１５２%
福岡粕屋海域	３８３尾	５９%	９７%
糸島海域	２６尾	１７%	１４%
筑前海平均	２７９尾	６５%	９０%

マダイ資源量調査の結果

（研究部）

藻場再生の取組が拡大

今年は、ＮＨＫの連続テレビ小説の影響もあり、素潜り漁に注目が集まっています。本県でも筑前海で素潜り漁が盛んですが、この漁を行う漁業者は男性が多いことから、本県ではアマは「海女」ではなく、「海士」と表現しています。

素潜り漁には、豊かな藻場の存在が欠かせません。しかし、近年、ガンガゼ等のウニ類が増加し、それらが海藻を食べることで藻場が減少した地区があります。

このため、地元の漁業者グループが藻場を回復させるため、ウニ類の除去などに取り組んでいます。これまでにウニ類を除去した漁場では、海藻の増加が認められ、漁業者の皆さんもその効果を実感しています。

小呂島でウニ類の除去作業を行う漁業者

この取組を行っている地区数は、22年度は15でしたが、25年度には20に拡大しています。センターでは、それぞれの地区で藻場の生育状況やウニの生息状況の調査を行うとともに、ウニ類の除去方法などを指導しています。

筑前海では、沖合での漁業の不振や燃油価格の高止まりにより、磯漁業や養殖業といった地先での漁業が見直されています。また、藻場は、磯漁場となることに加え、多くの魚介類の産卵場や稚魚の育成場となる「海のゆりかご」としての重要な役割があることから、藻場再生の取組が筑前海全体に広がっています。

センターでは、引き続き、各地の藻場再生に向けた取組を支援していきます。

（研究部）

アユ資源の回復に向けて

筑後川や矢部川における今年のアユの漁模様は芳しくありません。これは、昨年の豪雨により親アユが流出したり、河床が大きく変化したことによるものと考えられます。

このため、関係漁協では堅くしまった地盤を重機を使って耕耘したり、河床の整地による流速・水深の調整を行うことによってアユの産卵場を造成しています。

内水面研究所では、産卵状況の定期的な調査を行っており、今回造成した産卵場でもアユの卵を確認することができました。これらの卵が順調にふ化し、来年の春にはたくさんの稚アユが遡上してくれることを期待しています。

重機を使用し産卵場を造成

造成した産卵場に産みつけられたアユの卵

（内水面研究所）

筑前海沿岸でカレニア・ミキモトイ赤潮が発生

筑前海沿岸では、７月22日から31日にかけ、有害プランクトンの一種カレニア・ミキモトイの赤潮が発生しました。このプランクトンは、1mlあたり1,000細胞以上に増殖すると、魚介類をへい死させます。

今回、唐津湾や福岡湾では、１mlあたり１万細胞を超える場所もあり、この赤潮によるものと思われるサザエやアワビのへい死も確認されました。しかし、赤潮の発生が短期間であったこともあり、サザエなどのへい死は一部の漁場に限られていました。

カレニア・ミキモトイ

サザエやアワビのへい死殻

（研究部）

研究情報

ノリ乾燥機における省エネ技術の開発

板ノリを製造する乾燥機の燃料にはＡ重油が使用されていますが、平成21年３月以降、その価格は徐々に値上がりしています。

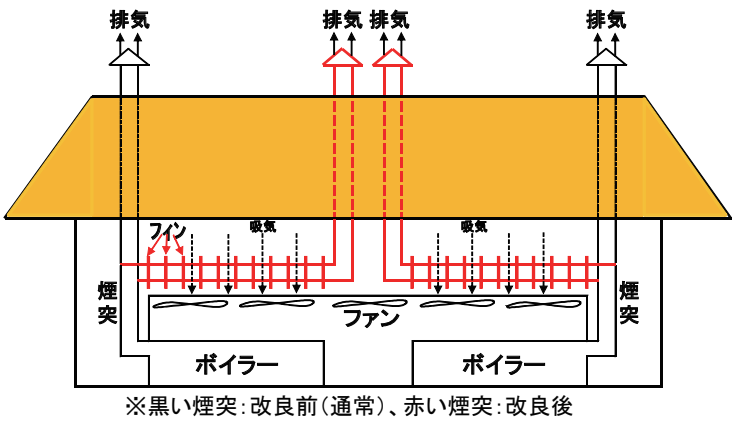
そこで、有明海研究所では、廃熱を利用できるように乾燥機の煙突を改良する技術開発に取り組みました。

その結果、煙突を90度曲げ、空気吸込口にあるファンの上部をはうように設置し廃熱を再利用する方法を開発しました。この方法を用いると、約18％の燃油の削減効果が認められました。

ノリ養殖漁家１経営体あたり年間約200万枚の板ノリを生産するので、削減できるＡ重油量は3,400Ｌ（ドラム缶17本分）となり、Ａ重油の単価を90円／Ｌとすると約30万円の経費節減となります。

また、協業施設や共同乾燥施設で使用されている大型のノリ乾燥機でも同様の削減効果が認められており、この方法は経費削減対策として有効な手段であることがわかりました。

改良型煙突の設置費用は、小型のノリ乾燥機用が約80万円ですので、２～３年で設置費用を回収できる試算となり、今後、漁業者への普及が期待されます。



改良型煙突を設置した乾燥機の模式図

ファン上に設置された改良型煙突

（有明海研究所）

なみなみニュース

小川知事がうのしま豊築丸を訪問

小川知事が県内各地に出向き、さまざまな分野で活躍されている皆さんと意見交換を行う「知事のふるさと訪問」が、９月 11 日に豊前市や吉富町、上毛町で行われました。

豊前市では、知事が豊築漁協直営の漁師食堂「うのしま豊築丸」を訪問し、旬のハモを使った料理を試食しました。

食堂では、旬の魚介類を使った料理を提供しており、これからの季節には、豊前本ガニや豊前海一粒かきが登場します。

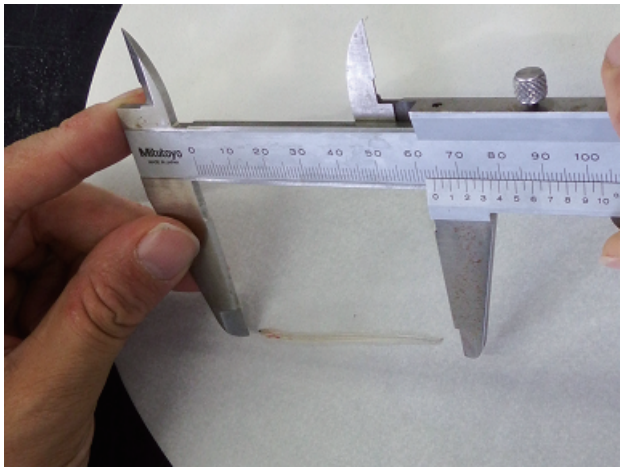
うのしま豊築丸のハモを使った料理

ウナギ対策会議が開催

ウナギ養殖では、天然漁場で採捕されるウナギの幼魚（シラスウナギ）を利用しています。その採捕量は最近、大きく減少し、ウナギ養殖の存続に関わる問題となっています。

このため、水産庁をはじめ関係機関が連携し、ウナギの安定供給を図るためのプロジェクトが進行しています。このプロジェクトには本県も参加しており、現在、筑後川におけるウナギの来遊や生息状況の把握に取り組んでいます。

８月には、水産庁において、行政機関、研究機関など関係者が一堂に会しウナギ対策会議が開催され、今後のウナギ資源管理対策について関係者間の共通認識を図りました。



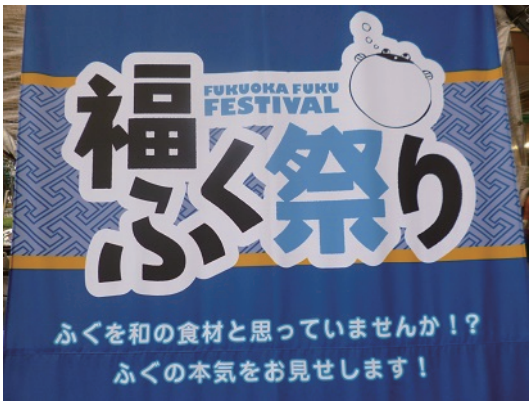
調査で採捕したシラスウナギを計測

福ふく祭りが開催

福岡県は全国有数のフグの産地で、トラフグをはじめ、地元でカナトと呼ばれているシロサバフグなど多くの種類のフグが水揚げされています。そこで、福岡のフグを県内外にＰＲし認知度を高めるため、県漁連などが８月30 日から９月１日にかけて、福岡市のベイサイドプレイスにおいて、福ふく祭りを開催しました。

イベントでは、フグ料理が 500 円で味わえるワンコインメニューの提供や、福岡県で水揚げされるフグの水槽展示などがありました。また、今回は、鐘崎天然ふくフェア実行委員会が、９月から始まるフェアのＰＲを兼ねて参加し、特製フグバーガーを提供しました。

期間中は、あいにくの雨模様となりましたが、フグの創作料理を目当てに多くの人で賑わいました。



会場に掲げられた福ふく祭りのタペストリー

県産ふぐを使った創作料理を提供する各店舗

アユのつかみ取りイベントが開催

内水面漁連などが、アユの販売促進を図るため、夏休み期間に朝倉市の三連水車の里でアユのつかみ取りイベントを開催しました。

子供たちは、プールを泳ぎまわるアユを捕まえようと全身びしょ濡れになりながらも一生懸命追いかけ、捕まえると大きな歓声をあげていました。

また、塩焼きのアユも提供され、アユを初めて食べたというお客さんも旬の香魚に満足そうな笑みを浮かべていました。

アユを追いかける子供たち

おいしそうに焼き上がったアユの塩焼き

11 月は県イベント満載

○農林水産祭り

今年は、隔年に実施される福岡県農林水産まつりの開催年になります。今回は、11 月 16 日（土）、17 日（日）に福岡市中央区天神の天神中央公園において県産農林水産物の試食・販売やイベントステージでのアトラクションなどが行われます。水産関係では、福岡のりや県産アユを使った加工品などが販売されます。

当センターも出展し、試験研究成果のパネル展示と、人気の“ちりめんモンスター探し”を行います。たくさんのご来場をお待ちしています。

○おめで鯛まつり

福岡県では、毎年 11 月を「フクオカ・サイエンスマンス（科学技術創造月間）」と位置づけ、青少年をはじめとする県民の皆さんに科学に対する理解と関心を深めていただくため、研究施設の一般開放や成果の紹介等を行っています。

センターでも、毎年恒例となった「おめで鯛まつり」を 11 月 23 日（土・祝）に行います（入場無料）。

イベントの詳細については、サイエンスマンスイベントガイドや、フクオカサイエンスマンスのホームページ（http://www.fukuoka-sciencemonth.jp/）、水産海洋技術センターホームページ（アドレスは下の欄）をご覧ください。こちらもたくさんのご来場をお待ちしています。

昨年の投網体験

これらの他にも、「フクオカ・サイエンスマンス」のオープニングイベントが、11 月 9 日（土）、10 日（日）にアクロス福岡で開催され、こちらでも“ちりめんモンスター探し”を行います。

普及だより

夏休みイベントを開催

今年も夏休み期間に小学生を対象とした体験イベントを開催しました。このイベントは、児童らに海や漁業について関心を持ってもらうために開催しており、今回は、水産資料館などを会場に「海の贈り物アートをつくろう」「海藻でしおりをつくろう」及び「かまぼこをつくろう」を行いました。

参加者からは、「来年もまた来たい」といった声を多く聞くことができました。

かまぼこづくりに挑戦

＜編集発行＞福岡県水産海洋技術センター企画管理部企画情報課
〒819－0165　福岡市西区今津1141番地1
TEL　092－806－5251　FAX　092－806－5223
センターホームページ　http://www.sea-net.pref.fukuoka.jp/
携帯電話対応　http://www.sea-net.pref.fukuoka.jp/mobile/